

# 大正十一年の宇野浩二文学―同時代評(五)から―

増田周子

大正十一年の宇野の活躍について、小島徳彌は、「大正十一年創作壇の人々」(『早稲田文学』大正十一年十一月十二日発行、二〇五号)の中で、「多作を以つて知られた宇野浩二氏が」、「数篇の小説しか書か」なく、「著しく元気がなくなつた」という見解を示した。大正十一年における宇野浩二の創作を発表月ごとに一覧すると、次のようである。

一月	「二人の青木愛三郎」「屋根裏の恋人」「或る青年男女の話」「或る女の冒険」
二月	「あの頃この頃」
四月	「夢見る部屋」「婚約指輪」「生まれぬ母親」
五月	「或る奇妙な結婚の話」
七月	「青春の果」
八月	「山恋ひ」「夏の海辺の話」

九月	「続山恋ひ」
十月	「早起の話」「長髪」
十一月	「ある家庭」「或る人の記録」

この他に、初出未詳で大正十一年に発表されたと思われる「彼と群集」があり、長編「女怪」の第十三回から第二十三回の部分を、一月から十二月にかけて、「婦人公論」に連載している。

宇野は大正十一年には、短篇小説十八篇を発表し、流行作家として活躍した。決して小島徳弥が言うように「著しく元気がなく」「数篇の小説しか書かなかつた」のではない。しかし、小島徳弥が、宇野浩二の大正十一年の活躍を概括して、「数篇の小説しか書かなく元気がなくなつた」という印象を受けたのは何故であろうか。大正十一年における宇野の作品に対する同時代評を管見に入つたものを次にあげる。

## 二人の青木愛三郎

「二人の青木愛三郎」は、「中央公論」(大正十一年一月一日発行、第三七年一号、一五三―二〇八頁)に発表された。「二人の青木愛三郎」は、次の単行本に収録されている。

一、『青春の果』(大正十一年九月二十日発行、天佑社)

二、『宇野浩二全集第三巻』(昭和四十三年九月二十五日発行、中央公論社)

「二人の青木愛三郎」の初出末尾には、(十・十二)とある。大正十年末には脱稿したらしい。「宇野浩二の半日」(文

士見たま、の記——（「文章倶楽部」大正十一年二月一日発行、第七年二号）には、記者と二人で自動車に乗ったことが記された後に、

この人（宇野浩二）は不思議な人で、家庭にゐる時は割合に口数が少いの、外へ出て、殊に乗物に乗ると雄弁になるやうだ。「二人の青木愛三郎」の筋を委しく話すのが大変面白かつた。

とあり、共に過ごした半日のうちに、自作やギッシングの小説などについての話を面白く語つたようである。同時代評には、次の堀木克三「今月の創作界（四）」（「時事新報」大正十一年二月五日発行・九〇九面）がある。

例の新年の「二人の青木愛三郎」などにしても、あの作のやはり根本の不満は作者に確かりしたものがなくして、現代の人道主義者を冷笑しやうとするがために、本物も贋物も一つ（何にもないものに両者の間の真の区別なぞは分りそうな筈はないが）、だから折角本物の青木愛三郎と贋物の彼れとを書き分けやうとしても何れも贋物位の程度にしか書けないが、従つて作者が折角皮肉なつもの主題として考へた二人の青木愛三郎も二人にはならなく、況んや作者が解釈の本物も贋物も偉いも偉くないも何でもない一寸したことの差異だ——例へば押して行く力、面皮が厚いか薄いかの差異だ（このことは作者が余程信じて居ること、いえて此の「あの頃この頃」の中でもそんなことを云つて居る）、偶然の結果だと云ふやうな解釈も一向価値の少いこと、なるわけである。そう云ふやうなわけで彼の「二人の青木愛三郎」などもその面白さは、やはりその枝葉の（と云つてもよくしたもので作者には自然と其拠が主になつて来る）いきさつや、出来事を語つて居る所にあるのであつた。

## 屋根裏の恋人

「屋根裏の恋人」は、「改造」(大正十一年一月一日発行、第四卷一号、二四〇―二八五頁)に掲載された。「屋根裏の恋人」は、次の単行本に収録された。

一、「屋根裏の恋人」(金星堂名作叢書十九) (大正十一年六月十五日発行、金星堂)

二、「宇野浩二全集第三卷」(昭和四十三年九月二十五日発行、中央公論社)

三、「部落問題文芸作品選集三九」(昭和五十二年三月二十日発行、世界文庫)

この作品に対する同時代評は、堀木克三「今月の創作界(四)」(「時事新報」大正十一年二月五日発行、九―九面)しか見当たらなかった。

今一つ宇野氏の新年のもので屋根裏に住む独身者が女恋しいところから知らずに隣の部屋に居た特殊部落の娘と関係してしまう所を書いたものを読んだのであつたが、あれはい、ものであつた。女のことをすなほに書けば誰でもい、ものが出来ると見える

## 或る青年男女の話

「或る青年男女の話」は、「表現」(大正十一年一月一日発行、第二卷一号、一四―五〇頁)に発表され、次の著書に収録された。

一、「青春の果」(大正十一年九月二十日発行、天祐社)

二、「宇野浩二全集第三卷」(昭和四十三年九月二十五日発行、中央公論社)

この作品に対する同時代評は、探し出せなかった。

### 或る女の冒険

「或る女の冒険」は「婦人世界」（大正十一年一月一日発行、第一七卷一号、一四五―一六二頁）に発表された。大正十一年一月一日発表された四作品のうち、この作品だけはどの単行本にも未収録である。また、同時代評も見られなかった。

### あの頃この頃

「あの頃この頃」は、「大観」（大正十一年二月一日発行、第五卷二号、三九八―四一三頁）に発表された。

明治末年頃の文科の学生達の生活振りや、流行などが、クラス会での会話や余興を通して巧みに描かれる。特に後年役者になる男やその仲間達、作家志望の私など、それぞれ個性的でありながら、ちよつぱり冷めた眼で描かれている。

「あの頃この頃」は、どの単行本にも収録されなかった。

「あの頃この頃」に対する同時代評は、次の一点である。

堀木克三「今月の創作界（四）」（『時事新報』大正十一年二月五日 九―九面）には次のように記されている。

宇野浩二氏の『あの頃この頃』（大観）これはほんの一寸したもので同氏の新年の『二人の青木愛三郎』など力の入つたものとは異なる。けれども一寸したものでも氏の例の面白く話をして聞かせる単に現代書生式気分のものではあらうがことは何れでも同じである。この小説では作者の（と云つてよかよう）某大学放浪時代の級友の一人

が新時代の俳優になつた——その実旧に変わらない斬つたり、はつたりする芝居で有名になつたのであるが、を、これも例によつて冷笑するやうな、褒めたやうな、皮肉るやうな調子で書いたものである。冷笑し、皮肉つて居ると如何にも面白いやうであるが、たゞその冷笑や、皮肉が、現代の単なる智巧さ以上に出て居ないものであつて、作者はそれ以上の何ものをも有せないとしたならば、単に笑せる意味の面白いもの、話し上手なもの以上に、真個の文学芸術と云ふ立場から見て何れだけ価値のあるものであらう。私はこの作者のものに対して常に此の疑ひを抱くものである。

### 夢見る部屋

「夢見る部屋」は「中央公論」(大正十一年四月一日発行、第三七年四号、二二七―二五九頁)に發表された。宇野浩二は「僕の作品に就て文学に志す若き人々へ」(「文章倶楽部」昭和三年十月一日発行、第三卷一〇号)に於いて、次のように自評している。

「大正十一年作、九十三枚。矢張り作者の空想の産物。作者のロマンティシズムの傾向を表現した作。捨て難し。」宇野浩二には、初期の「清二郎夢見る子」に始まり、「夏の夜の夢」「夢見る部屋」……とまだ紹介はしていない一連の「夢」を重視した作品が多い。「夢」を考えるための一作品としてこの作を読めば面白いといえる。なお、「夢見る部屋」の中の煙草屋の娘は、星野玉子をモデルにしたものだといわれている。また『夢見る部屋』(桜井版名作選書)(昭和十七年二月二十日発行、桜井書店)の「後記」で、「私小説の形をしてゐながら、『夢見る部屋』は空想が九分であり、」と自注したあとで、次のように述べている。

『夢見る部屋』は、大正十一年三月の作であるから、私が、三十二歳の年で、今の櫻木町の家の前の家（今の家から五六軒さきの、大地震前まで住んでゐた、家である。その家は江口渙に紹介してもらつた借家で、江口はその家の眞裏の家に住んでゐた。又、その家には、私が越してから、一年あまり、牧野信一が住んでゐた。）で書いた小説である。この小説を読んだ久米正雄が、その頃、私に、「君は面白い生活をしてゐるね、」と云つたので、私が「あれは嘘だよ、」と答へると、「なアんだ、嘘か、」と久米は微笑した。つまり、「夢見る部屋」は、よかれあしかれ、久米を微笑させた小説である。さうして、たとひ器量はよくないとしても、私には憎からぬ作品である。

この『夢見る部屋』は、次の単行本に収録された。

- 一、『青春の果』（大正十一年九月二十日発行、天祐社）
- 二、『新選宇野浩二集〈新選名作集〉』（昭和三年八月二十日発行、改造社）
- 三、『夢見る部屋〈桜井版名作選書〉』（昭和十七年二月二十日発行、桜井書店）
- 四、『宇野浩二集〈現代文豪名作全集〉』（昭和二十九年一月三十一日発行、河出書房）
- 五、『宇野浩二全集第三卷』（昭和四十三年九月二十五日発行、中央公論社）
- 六、『宇野浩二・広津和郎集〈現代日本文学大系（四六）〉』（昭和四十六年九月十五日発行、筑摩書房）
- 七、『宇野浩二〈日本幻想文学集成二七〉』（平成五年八月二十日発行、国書刊行会）

この同時代評は探し出せなかった。

## 婚約指輪

「婚約指輪」は、「新小説」(大正十一年四月一日発行、第二七年四号、九八―一九頁)に発表された。

この作品は「婚約指輪の軽蔑すべからざる所以」という演題での講演という形式で書かれた。饒舌を駆使した一風変わった作品である。

「婚約指輪」は、『青春の果』(大正十一年九月二十日発行、天祐社)にのみ収録された。

「婚約指輪」の同時代評は、次の二つが管見に入った。

宮島新三郎「四月の創作」[下] (『読売新聞』大正十一年四月五日発行、七―七面)に、「紙数がない」からとして次の寸評がある。

宇野氏の『婚約指輪』は、性格を深く鋭くほつて行つてこそ、意義ある作品となるのだが、之では観察が皮相だ。外殻だけだ。面白い観察とは言へても深刻な観察とは言へない。

次に十一谷義三郎「四月号から」(『時事新報』大正十一年四月八日発行、九―九面)である。

宇野氏の饒舌もこの作品では内容をフヤケさす以上の効果を持つてゐないやうだ、たとへ不自然でも又たとへアクドクともそこにアムビションのある間は氏の饒舌にも生命があると私は考へてゐる、それは前以つて決定的にある種の調子を作品に與へて終ふと云ふ缺點を持ちながらも尚且つ作者の空想の活躍を自在ならしめると云う好い特徴を持つてゐるためだ。然しそのアムビションが影を薄めると空想も平凡なものになり従つて作者の饒舌も生気を失つて芸術味の稀薄なものになつて終ふのだ、勿論この場合には作者の反省によつてその饒舌は捨てらるべきだ。

この作のA―君に似た性格を独歩が扱つてゐたのを思ひ出す。独歩は眞正面からゆくことより知らない作家だつ



た。独歩の題は確か『非凡人』と云つた。それとこの『婚約指輪』とを並べて考へるとこの作者の側面からのいき方及びそれによつて作者が當然支拂はねばならぬ代価がハッキリするやうだ。作者にもつと誠實があればあの初め数頁に渡るダルな叙述は捨て、終つて非凡な平凡人A―君を更に活躍させ得たらう。作者にもつとアムビションがあればこの作品は更に機智と諷諷と従つて魅力とを加へ得たらう。

## 青春の果

「青春の果」は「新小説」（大正十一年七月一日発行、第二十七号、一一―三九頁）に發表された。次の單行本に収録された。

一、『青春の果』（大正十一年九月二十日発行、天祐社）

二、『新選宇野浩二集（新選名作集）』（昭和三年八月二十日発行、改造社）

三、『宇野浩二全集第三卷』（昭和四十三年九月二十五日発行、中央公論社）

「青春の果」の同時代評は、次の一点が管見に入つた。

藤森淳三「七月月評・批評と紹介（八）」（『時事新報』大正十一年七月十五日発行、九―九面）に、「新小説には正宗白鳥氏の他に、なほ宇野、近松両氏の作品があるが、この両氏の対象はいろんな意味で私に興味があつた、」とした後、次のようにある。

先づ宇野浩二氏の『青春の果』は題に示す如く、三十歳を過ぎて二十歳時代の青春を回顧しながら焦燥たる気持ちになり、謂はば漸く過ぎ去つた青春の歡樂を追馳ける、といふやうな心持を描いたものである。手法は相変らず、

巨細構はず書き盡すといふ行き方で、それが寧ろ煩雑に過ぎる位お喋りである。而もそのお喋りも以前ほど巧くなつた。何んだか読み辛く讀んだ印象もどうやら稀薄な氣がした。そして又、風俗壞亂發賣禁止といふやつを恐れたためか、所々削つた箇所もありながら、妙にイヤらしい春本的な臭ひが漂つてゐるのも堪らなかつた。

この同時代評の「所々削つた箇所」というところを調べてみた。初出「青春の果」で一行ずつ空白になっている所が数か所と、三八頁に九行もの空白箇所がみられる。これは、『宇野浩二全集第三卷』の、三二八頁下段十五行目から、三二九頁上段八行目にあたる。初版本『青春の果』で、約 $\frac{1}{2}$ おこされ、昭和三年の『新選宇野浩二集(新選名作集)』以降の単行本では、完全におこされた。

## 山恋ひ

「山恋ひ」は、「中央公論」(大正十一年八月一日發行、第三七卷九号、一―六二頁)に發表され、「続山恋ひ」は、「中央公論」(大正十一年九月一日發行、第三七卷十号、五七―一〇一頁)に掲載された。「山恋ひ」は「続山恋ひ」とまとめられ、次の単行本に収録された。

一、『山恋ひ(中編小説叢書八)』(大正十一年十一月二十八日發行、新潮社)

二、『我が日我が夢』(昭和二年八月十日發行、新潮社)

三、『近松秋江・宇野浩二篇(明治大正文学全集四二)』(昭和四年十月二十五日發行、春陽堂)

四、『山恋ひ(改造文庫第二部)』(昭和七年十一月三十日發行、改造社)

五、『山恋ひ』(昭和二十二年九月十日發行、共立書房)

六、『宇野浩二集（現代文豪名作全集）』（昭和二十九年一月三十一日発行、河出書房）

七、『宇野浩二全集第三卷』（昭和四十三年九月二十五日発行、中央公論社）

八、『長野県文学全集三』（昭和六十三年七月十五日発行、郷土出版社）

「山恋ひ」に対する同時代評は、次の三点である。

林政雄「八月々評のつゞき（三）」（『時事新報』大正十一年八月四日、九〇九面）は、「今文壇で、ユーモアを有つた作家と謂へば近頃の藤森成吉氏と宇野浩二氏とだらう」と、藤森成吉「或る体操教師の死」（『解放』大正十一年七月一日）と述べて、宇野浩二の「山恋ひ」を、次のように評した。

斯の作者は、浮世の戀と酸いと甘いとを、ゴーゴリ張りの寂しい静觀に湛へて、もの和かに微笑する、そしてどの人物からも作者一流の人間らしい滑稽味を抜き出して来て、さて徐かに筆を執ると、小さな板ベラは、その引き出した繪具で、しつくりと和らかに、深々しい潤ひを有たせて、塗りくるめられるのである。要するに斯の作は、以上の氣分と情調とを出したもので、例の藝妓夢子を想ふ「私」といふおとなしい主人公と、故里の信洲を離れて東京に出ると、ゆくりなくも「山恋ひ」にかかる、はにかみやで内氣な或る若い男との物語りである。そしてこの作者は、情景をはつきり印象に捕捉することや心理を究めて行くことに不得手らしい。だから作は、部分的には、描寫の稀薄なだらだと寧ろ冗漫の嫌ひさへある。しかし逆にその故に、全體としての氣分と情調とを流す物語り風なものが作者の境地らしい。

次に、直木三十二「新秋の作品（六）」（『時事新報』大正十一年九月十四日発行、九〇九面）である。

宇野浩二氏の「山恋ひ」前編は讀まなかつた。「続山恋ひ」（中央公論）を讀んでみた餘り感心しなかつた人の

噂さによると前編の方がよかつたさうであるさうだらうと自分も思ふこの続編は餘りに繼ぎはぎだらけのやうな氣がする細工が目につきすぎる<sup>マヤ</sup>である。

次に、藤森淳三「作と人との印象(其五)―宇野浩二と私―」(「新潮」大正十二年二月一日発行、八〇―八〇頁)に次の評がある。

「山戀ひ」は當時雜誌で讀まなかつたので、今度これを書くために、實は一昨日一日がかりで、退屈しながら、それでも漸つと讀み通した。しかし、この作品は決して悪いものぢやあなかつた。宇野浩二ぢやあないが、いゝものならそれがたとひ親の仇きの書いたものでも素直に感心する私は、無論親の仇きでも何んでもない彼の書いた小説だもの、それあよければ直ちに感心する位の度量は持合してゐる。「山戀ひ」は先づよろしい。つまり、傑作とまでは思はないのである。しかし私は、漸く此處あたりで、宇野が素直に自分の生地を出して來たんぢやあないかと思ふ。鼻の寸の詰つた西向觀山といふ男や、女の腐つたみたいな堀戸や、又哲學者で相場をやるといふ、そして始終借金取に追かけられてゐる市木や、さうしたへんに滑稽感を誘ふ、その上惨めな人物ばかりを登場させてゐる點は、やはりこれまでの彼と些かの變りもない。が、彼はこの作では稀らしく生地で行つてゐる。それだけは確かだ。其處がいい、と思つた。而も彼は、これで見ると詩人であつた。主人公はじめ、大抵の人物が山を戀ふる氣持と云ひ、又、主人公がゆめ子を思ふあのプラトニツク・ラヴ(?)と云ひ、彼もまた遂に詩人であつた。作者は作中の一人物を藉りて、「あなたは浪漫派ですなえ」と云はせてゐる。全くその通り、この作者は浪漫派の詩人なんだ。主人公と西向と堀戸の三人が山へ登るところなんか、さう云へば如何にも詩人らしい描寫(いや、説明)であつた。何んの、何んの、宇野浩二が人生の通人なぞであるものか。彼は先づ何よりもさきに、その性根<sup>しやうね</sup>は浪漫派の詩人な

んだ。

宇野浩二は『山恋ひ』（昭和二十二年九月十日発行、共立書房）の「あとがき」で、次のように述べている。

「題名は、『山恋ひ』であるが、ここにをさめられてゐる小説は、俗に、「諏訪物」といはれる、連作である。その連作を、小説の話の順でいふと、『人心』、『甘き世の話』、『心中』、『一と踊り』、『夏の夜の夢』、『山恋ひ』の順である。（中略）この小説を発表したころは、『私小説』といふものが流行して、それらの小説は、たいてい、作者自身のことをありのままに述べたやうにいはいはれてゐたが、私の小説は、嘘と誠のまぜこぜで、事実といへば、嘘のほうが多い。（中略）たとへば、『山恋ひ』の前編のなかに、諏訪の神社の御柱の祭の光景は、読んだ人が、「私は、御柱の祭は見たことがあるけれど、あの小説にあるやうなことはなかつた、」といった。それは、あたりまへで、私は、あの祭の話は、人から聞いただけで、あとは空想で書いたからである。」と、『山恋ひ』をなつかしんでいる。

「山恋ひ」は大正八年九月、広津と二人で初めて上諏訪を訪れた宇野が、信州の山々とそれに囲まれた湖の美しさに魅せられ、そこで出会った旦那のいる子持ち芸者「ゆめ子」とのプラトニックな恋を描いたものである。

音楽好きな芸者、明神の御柱祭り等を織り込みながら、届きそうで届かない山々の稜線をゆめ子になぞらえ、彼女への憧憬や愛情を感じさせる作品である。

## ある家庭

「ある家庭」は「女性改造」（大正十一年十一月一日発行、第一巻二号、八六―九九頁）に掲載された。「ある家庭」

は、『子を貸し屋』(大正十三年七月五日発行、文興院)にのみ、収録された。

この作品については、モデルについて取り沙汰されたようで、無署名「不同調」(「新潮」大正十一年十一月一日発行、第三七卷五号、七〇―七一頁)に次のよう記されている。

近頃不愉快な小説は、「女性改造」所載、宇野浩二氏の「ある家庭」である。

江口渙氏が「無数の寫眞機」といふ小説に、宇野といふ人物が出て来る。その言語動作の端々に宇野浩二氏らしいところがちよいと出てゐる。その外に、岡、佐々木、久米、大橋などといふ人物が出て来る。佐々木が、佐々木茂索氏であるなら、佐々木茂索氏の憤慨するのは無理はない。江口氏も、サリトハやり過ぎたものである。あの江口氏近來の佳作も、かういふ樂屋落的悪イタヅラの爲めに、大分価値がさがつてゐる事を感じざるを得ない。だが、「ある家庭」を書いた宇野氏の意識に、「無数の寫眞機」のシツペイ返しに氣持が含まれてゐるとすれば、宇野氏は、一にむくゆるに十を以てしたものといはなければならぬ。「無敵の寫眞機」は、はじめに書かれてゐるが、宇野といふ人物は、唯ユーモラスにし取扱はれてゐない。「ある家庭」は、ユーモラスの筆であるが、底意地の悪い悪意が見え透いてゐる。

樂屋落文學、更に墮落して、私憤文學となり、犬糞文學となる。唾棄す可きである。

聞説、宇野浩二氏は、江口渙氏が、「無数の寫眞機」の中でモデルにしたからと云つて、復讐的に、「婦人改造」に「ある家庭」と題して、江口君と元の細君との家庭生活の素破抜きを書いたと云ふことである。若し、これが眞なりとすれば、文壇の彈正臺を以て任ずる不同調子は到底黙過することは出来ないのである。怒つたのなら堂々と本人に向つて抗議を申し込めば好い。何も作品に於て具體的にうそまことき交ぜて、描く必要はないのである。

これ正に藝術の名によつて私憤を洩らさんとする陋劣唾棄すべき心情を暴露したのに過ぎないのである。

江口君にも悪いところがあるかも知れぬ。併し、それだからと云つて、作品で敵打をしようとするなどは女の腐つたやうな人間のやることである。

同時代評としては、次の一点がある。松葉蝶（『東京日日マガジン』大正十一年十一月十二日発行、第一年三八号、七―七面）である。それには、次のようにある。

「ある家庭」（宇野浩二）——女性改造 先月の新潮にでた江口渙氏の「無数の寫眞機」に、宇野氏がモデルにつかはれた腹癒せを、この作でしたと傳へられて、文壇の物ずきな連中を騒がせたものである。いつものやうに落語家調のみごとな筆で、興味中心に讀むもの、心が運ばれて行くやうに思はる。細君の留守に女中を口説いて成功しなかつた主人公の足尾潔が、翌朝になつてその女中が逃げたといふことを聞いて、細君といつしよにその女中の蒲團をあけて寝小便の後を発見したとき、細君からその始末をきかれて、『捨てつちまへ！』と元氣にいつたといふ結末などは、宇野氏でなければ、見られないものである。とりとめもないもの、多い氏の作の中で、これなどはかなりによく纏つたもの、一つであらう。

その他、「生まれぬ母親」「或る奇妙な結婚の話」「夏の海辺の話」「早起の話」「長髪」「或る人の記録」などがあるが、これらに対する同時代評はみつけれなかつた。

大正十一年に発表した作品は、『屋根裏の恋人』、『青春の果』、『山恋ひ』、『夢見る部屋』と著書のタイトルルになつて刊行されており、前記したように、それぞれ多くの本に収録されている。初期の宇野浩二を考へる場合、もつとも宇野浩二らしい作品であることは明らかである。「夢と詩があつての人生であり、詩と夢があつての文学である」という宇

野浩二にとって、「夢」がどんなに大事なものであるか、『清二郎夢みる子』に始まって「夢」のタイトルのついた著書は、実に十冊にもものぼることからも推察される。

しかし、「夢見る部屋」に対する同時代評も一点も管見に入らなかつたし、「山恋ひ」にしても、林政雄氏の、「ユーモアを有つた作家」だとか、「描写の稀薄なだらだと寧ろ冗漫の嫌ひさへある。」などという評であつたり、直木三十二氏も、「続編は継ぎはぎだらけのやう」だとかで当時の評論家の受けは必ずしも芳しいものではなかつた。

こういう状況で、大正十一年は宇野浩二の作品が少なかつた、という印象を小島徳彌にもたれたようである。